

早稲田大学大学院教育学研究科

博士学位申請論文

概要書

水俣に学ぶ歴史教育の実践的研究

小川 輝光

1. 問題意識と先行研究

本論文は、水俣病をめぐる歴史学習について、「社会のなかで取り組む歴史学習」と「教室のなかで取り組む歴史学習」の二つの視角から考察し、子どもが歴史を自分のものとしていく過程を解明するとともに、社会と教室をつなぐ歴史教育の理論を提示することを課題にしている。

現在の歴史教科書のなかで「水俣病」は「高度成長の影」や「四大公害病」として描かれる。自分と接点のない「過去の問題」と捉える生徒も少なくない。いっぽうで、社会のなかでの水俣病は、訴訟が続いたり、新たな問題が指摘されたり、現在進行形である。社会のなかで人びとにより経験されている歴史と、歴史教育で学ばれる歴史をどのように結び付けることで、生徒が歴史を自分のものとしていけるのだろうか。

「歴史を子ども自身の問題として意識させる」ことをめざす歴史教育の実践的研究は、1970年代後半からはじまった（白井 1982）。1990年代以降に研究は本格化し、宮原武夫氏により歴史認識の形成を「事実認識→関係認識→意味認識」で捉える三段階論が提唱され（宮原 1998）、社会科教育学では科学的説明から構成主義的授業研究へと移行する（原田 2000）。いっぽうで、今野日出晴氏が教科書問題などの同時代の課題に向き合うなかで「歴史教育の認識論」を提唱し（今野 2008）、近藤孝弘氏が社会のなかの歴史意識や歴史文化を対象とする「広義の歴史教育」の必要を説くなど（近藤 2020）、授業研究だけでなく、社会のなかに歴史教育を置く必要も指摘されてきた。近年の高校歴史教育改革のなかでも、生徒自身がどう歴史を捉えるのかという視点が重視され、「個人的レリバンズ」「社会的レリバンズ」という言葉も使われるようになっていく（二井 2022）。

そのような歴史教育研究のなかで、近年頻繁に使用されるようになった概念の一つに「歴史実践」がある。そもそも保莉実氏が日常のなかで人びとが歴史にふれる広範囲な諸行為を意味づけるために用いた概念だが（保莉 2018）、歴史教育では次のように使用されている。たとえば、今野日出晴氏は教科書のような the history に対して教師や生徒の a history に着目する際に使用し、小川幸司氏は歴史実証、歴史解釈、歴史批評、歴史叙述、歴史対話、歴史創造という歴史実践の六層構造を提示している（小川 2021）。社会科教育学では Doing history の紹介のなかで、歴史家のように学習することや実用主義的な歴史教育論として言及されている（中村 2013）（渡部 2019）。これらの研究では、生徒が歴史に能動的な生産者としても捉えている特徴がある。視野を社会に広げると、戦争や災害などの事象をめぐる、研究者以外の人びとが行う歴史実践に対する関心が高まっている（大門ら 2013）。このように歴史実践の研究は進んでいるが、生徒による歴史実践の実証研究や、社会のなかの歴史実践と学校教育を結び付ける研究は、ほとんどないのが現状である。その結果、歴史実践としての歴史教育の実態も不明瞭である。そこで本論文では、社会のなかにある歴史の現場と歴史教育を接合させ、教師とともに生徒による歴史実践を捉えることで、歴史実践として

の歴史教育とは何かを明らかにしていきたい。

もう一つ本論文で参照したのが「世界と出会う」歴史教育の系譜である。網羅的に世界のできごとを学ぶことではなく、生徒一人ひとりが世界と出会うことで「自分づくり」をするという歴史実践である（吉田 1995）（小川 2023）。他者の歴史をふまえて、その歴史を自分のものにする取り組みであり、地域や身近なことから「他者と出会い」「普遍に気づく」という点に参照すべき点がある。本論文は、この系譜を継承し、個別具体的な歴史実践が歴史教育で持つ意義について考察を深める。

以上の歴史教育の実践的研究を深める対象として、本論文では水俣病の学習を選んだ。その理由は、「公害」や「水俣病」の捉え方に変化が起こっており、歴史教育の対象として検討すべき段階にあることと、公害や水俣病の経験を継承することが歴史実践として捉えられることが、検討対象にふさわしいからである。

水俣病の研究は、公害闘争全盛の 1970 年前後に、訴訟の支援を目的とした学際的な研究としてはじまり、被害者の立場に立って加害／被害関係を軸とした。だが、訴訟後には色川大吉氏らの不知火海総合学術調査のように、より広く近代化の過程のなかで普遍的に捉えようとする研究動向に転じる（色川 1983）。近年、「公害」や「水俣病」を「地域の価値」とする歴史実践も行われており（除本・林 2022）、学習者自身が歴史を紡ぐ取り組みにかかわる視点が提示されている。さらに、水銀条約（2013 年採択）発効を機に、世界規模で水銀管理の問題が検討されている。これからの水俣病の歴史学習では、日本の高度成長の歴史の枠内だけで捉えるのではなく、世界的な射程をもち、現在の社会においても参照できる問題として捉え直していく必要がある。

本論文では、このような水俣病研究の成果をふまえながら、歴史教育の対象として水俣病を捉える。水俣病をめぐる社会の変化を分析し、その歴史を生徒がどのように自分ごととしていくのか、実践的に解明したい。

2. 研究の課題と方法

現地水俣ではさまざまな活動があり、水俣に学ぶ歴史教育も多く取り組まれている。本論文では、これらを〈水俣の学び〉と呼び、以上の先行研究もふまえて、本論文の課題を二つ設定する。第一に、水俣病の歴史と経験が生徒のものになる過程について、〈水俣の学び〉の取り組みから明らかにする。第二に、第一の課題の追究を通じて、歴史教育に新たな知見を加える。

このような課題に向き合うために、本論文では歴史教育を「教室のなかで取り組む歴史学習」と「社会のなかで取り組む歴史学習」に分けて考察し、両者をつなぐ「歴史実践」の動態を明らかにするという方法をとる。

歴史実践は、アボリジニのオーラル・ヒストリーを研究した保莉実が提起した概念であり、人びとの「日常の実践において歴史とのかかわりをもつ諸行為」を指している。近年、「歴史実践」は歴史研究のさまざまな局面で取り組むことが試みられて

いる。背景には、あらためて歴史と人びとのかかわりを広くとらえようとする機運があり、本論文では、歴史実践に新たに「学び」という過程を組み込むことを試み、「社会のなかで取り組む歴史学習」と「教室のなかで取り組む歴史学習」をつなぐところにあられるさまざまな問題を歴史実践として考察する。以下、二つの歴史学習の関係と「歴史実践」について説明をしておきたい。

通常、歴史教育は「教室のなかで取り組む歴史学習」を中心に理解されている。教室では、教師と生徒によって、教科書などの教材を用い、通史を中心とした体系的な歴史が学ばれている。いっぽうで、水俣病のような現在でも社会問題として持続する対象では、社会での理解のされ方や語られ方も、教室の学びに影響を持つ。社会で歴史を学ぶ場合、カリキュラムがないことが多く、想定外のことも起こる。また、通史的な内容ではなく、個人や特定の団体・地域などの経験を通じて学ぶ点も特徴である。このような学校以外の場で行われている教訓化や記憶の継承などの歴史実践に学ぶ取り組みを指して、「社会のなかで取り組む歴史学習」とする。「社会のなかで取り組む歴史学習」を検討するために第1部を、「教室のなかで取り組む歴史学習」を検討するために第2部をそれぞれ設定する。この手順で検討することで、社会のなかの水俣病の捉え方の変化が、いかに教室での学習に影響を与えるかを明らかにする。なおここでの歴史教育とは、水俣病という産業革命以降の資本主義社会のなかで顕在化する公害や環境汚染を対象とするために、近現代の歴史教育という限定的な性格を持つことも自覚したい。

水俣地域のなかで、水俣病の歴史と経験を想起し、現在の課題にいかしていこうとしている取り組みがある。そして、その取り組みに学び、教室で身の回りにある社会問題や学習者自身の生き方の問題として捉え直す学習活動もある。これらを「歴史実践」として把握し、「社会のなかで取り組む歴史学習」と「教室のなかで取り組む歴史学習」の関係を明らかにする。つまり、学校と社会をつなぐための概念として「歴史実践」を使用し、これまで明らかにされてこなかった「歴史実践としての歴史教育」の一つの姿を具体的に提示し、以上を通じて歴史教育に新たな知見を加えたい。

このような方法をとることで「歴史実践」とは何かが一定明らかとなるが、歴史が子ども自身のものとなるための歴史教育としてどのような道筋を見出せるかという新たな課題も浮かび上がる。そこで、水俣のなかでの歴史実践を子どもたちがフィールドワークを通じて学ぶ「社会のなかで取り組む歴史学習」から得た知見を、「教室のなかで取り組む歴史学習」に反映させる取り組みを行う。具体的には、教科書に代わる新たな教材を開発し、その一部を授業で活用し、子どもたちの学びに起こる変化を明らかにする。

3. 各章の概要

次に、本論文の概要を述べたい。目次と各章の概要は以下のとおりである。

序章 水俣の歴史をどのように学ぶのか

- 第1節 問題の所在
- 第2節 歴史教育研究と歴史実践
- 第3節 なぜ水俣を対象とするか
- 第4節 課題・方法・構成

第1部 社会のなかで取り組む歴史学習

第1章 水俣病をめぐる学習史

- 第1節 公害教育のはじまり（Ⅰ期:1968-73年）
- 第2節 公害教育の制度化（Ⅱ期：1973-85年）
- 第3節 〈水俣の学び〉への転換（Ⅲ期:1985-95年）
- 第4節 総合的な〈水俣の学び〉（Ⅳ期：1995-2011年）
- 第5節 3・11後の〈水俣の学び〉（Ⅴ期:2011年以降）

第2章 地域社会のなかで生じた〈水俣の学び〉——1980年代の水俣における学習活動を中心に

- 第1節 水俣からの問い——個に内在する普遍性
- 第2節 事件史を超える広がり
- 第3節 学校教育への還流——「普遍への気づき」
- 第4節 地域再生とその困難——〈水俣の学び〉のフィールドの形成

第3章 3・11後の社会で水俣病の経験に学ぶ歴史実践——〈水俣の学び〉のフィールドワーク

- 第1節 授業の概要——3・11後の社会と水俣
- 第2節 フィールドワーク体験の意義
- 第3節 空間とモノから歴史を読み取る体験
- 第4節 語りと経験から歴史を読み取る体験

第4章 生徒にとっての〈水俣の学び〉と歴史を自分のものとする過程——一人の生徒に即した歴史実践

- 第1節 分析の対象と方法
- 第2節 1年間の学びの過程
- 第3節 〈水俣の学び〉が自分のものとなる

第2部 教室のなかで取り組む歴史学習——世界のなかでの水俣

第5章 世界のなかで学ぶ水俣——〈水俣の学び〉の教材化

第1節 教科書のなかの「公害」と「環境問題」

第2節 世界史の転換と公害・環境問題の結節点

第3節 水俣病が問いかけるもの——「他者との出会い」と「普遍への気づき」

第4節 グローバル時代の「環境問題」の捉え方

第6章 世界との出会いに着目する水俣の授業——カナダの「水俣病」を事例に

第1節 カナダの「水俣病」

第2節 先住民の証言を読む

第3節 歴史実践による生徒の認識の変化

第7章 〈水俣の学び〉から「私のできること」を考える授業——公害輸出と環境汚染問題

第1節 問題を重ねて考える

第2節 「公害への責任」を考える授業とその考察

第3節 「私」の街との関係に置き換えて考える

第4節 「私にできること」を考える歴史実践とその考察

終章 水俣に学ぶ歴史教育の実践的研究

第1節 〈水俣の学び〉という歴史実践

第2節 歴史教育の実践的研究

第3節 展望と課題

「社会のなかで取り組む歴史学習」を第1部、「教室のなかで取り組む歴史学習」を第2部と分けて構成し、社会のなかの水俣病の捉え方の変化が、いかに教室での学習に影響を与えるか検討をすすめる。

第1章では水俣病の学習史を概観する。水俣病の学習は、田中裕一の授業を皮切りに加害／被害関係を問う、公害教育としてはじまった。1970年代から80年代前半にかけて公害教育は制度化されるが、形骸化も進んだ。転換点となるのが80年代半ばで、現代的な課題を捉え、患者の生き方に学ぶ学習に変化する。本論文では、これを〈水俣の学び〉と呼ぶ。90年代後半以降には、水俣で「もやい直し」がはじまり、新たな段階に進む。水俣の全学校で授業が進められるとともに、水俣学のような総合的な研究と学習がはじまり、県外からの研修も増える。2011年の東日本大震災以後は、水俣病と原発問題の構造的な類似点が見られ、普遍的に捉える学習が増える。本章で

は、以上のような〈水俣の学び〉という、公害教育と異なる水俣病の学習の存在を析出した。

次に、第2章では、その〈水俣の学び〉はなぜ生じたのか、1980年代の水俣の学校外の動向に探る。患者支援組織である水俣病センター相思社では、職員だった柳田耕一らによって水俣生活学校が開かれ、チッソ型社会とは異なる生活を生みだそうとしていた。患者・浜元二徳は、アジアの環境問題と取り組む人たちと連携してアジアと水俣を結ぶ会をつくり、公害輸出などの問題に取り組むはじめる。他方で、元チッソ労働者・鬼塚巖や患者たちは、不知火海総合学術調査の訪問にあわせて現地調査を行い、水俣病以前の不知火海の人びとが織りなしていた自然との関係を学びなおす。これらは水俣病闘争の行き詰まりのなかで、水俣病が問いかける普遍的な問いに迫り、個人の生き方として実践するように変化することではじまった歴史実践だった。〈水俣の学び〉は、このように社会のなかの学びとしてはじまるが、相思社の〈水俣の学び〉から「学校とは何か」を問い直す教師たちが現れ、その一人の水俣高校石井雅臣は地域のなかに入って生活のなかの水俣病をつかもうとしていた。「知ること」と「生きること」をつなごうとするこれらの取り組みは、水俣病から普遍的な問題を捉え、生き方に反映させる「普遍に気づく」学びだった。このような学びは、「もやい直し」がはじまる90年代後半以降に本格的に学校教育に取り入れられる。これまで患者運動に距離をとっていた市民も含め、地域にとっての水俣病の経験を問う動きが起こるようにもなった。その結果、現地には〈水俣の学び〉のフィールドが形成された。

第3章では、そのような現地に学ぶ〈水俣の学び〉の事例として、3・11東日本大震災後に筆者が取り組んだフィールドワーク実践を検討する。2011年度の取り組みは、生徒が原発事故による放射能汚染と重ねて水俣病を捉えて教訓を引き出そうとしている点が特徴だった。フィールドには、現場固有のモノや空間があり、そこには多義的な意味が込められている。また個人の語りから水俣病の経験をつかんでいくが、この年は特に患者・杉本雄が「水俣病」という名称を肯定的に受けとめたことが、福島の「風評被害」にふれていた生徒たちには印象的だった。このような現場でしかえられない体験を通じて、生徒たちは「原発や水俣と共存する世界」という普遍的な問題について考察していく。地域外部から水俣に来る研修では、地域外の人にとっても学ぶ価値を見いだせる普遍的な課題が重要で、そのうえで水俣病をめぐる個人的な経験や、さまざまな立場の人たちが暮らす水俣に学ぶことができた。

第4章では、第3章で取り上げた授業のなかで、1年間で生徒はどのような学びを経験し、社会や歴史の認識を変化させていくのかを、一人の生徒に即して明らかにする。通常、教室での1回の授業を通じて、生徒の変化を検討することが多い。それに対して本章では、教室外を含め、長期間の変化をたどることにした。検討結果として、多様な学習の契機が存在することが確認されるなかで、特に重要な転機となったのは、水俣での杉本雄の「水俣病」という名称を巡る発言を通じて、人が置かれた「状況」

と、名称に対する人びとの「認識」を理解することだ、と学んだことだった。KSのフィールドワークでの知見は、自らが暮らす地域の震災ガレキ受け入れ「状況」と重ね合わせることで構造的な認識となり、消費者、職業人としての生き方について当事者性をもって考えるようになった。この過程には自分の知らない水俣病経験という「他者との出会い」を介して、身近な社会にも通じる「普遍に気づく」という学びが存在していた。水俣病という生徒には遠い歴史経験を、自らの生き方に加えていく過程には、このような学びの実態が存在していた。

このような第1部の「社会のなかで取り組む歴史学習」をふまえて、「教室のなかで取り組む歴史学習」を考察するのが第2部である。「社会のなかで取り組む歴史学習」でえた水俣病の捉え方を反映させた教材を作成し、それに基づいてモデルとなる授業を2つ実践した。この取り組みを分析することで「教室のなかで取り組む歴史学習」における歴史実践を検討していく。

現行の教科書では、環境問題や公害を通時的に理解しづらい状況がある。その理由は、日本の公害と世界の環境問題を接合する叙述になっていないからである。そこで、第5章では、世界の開発と成長をめぐる歴史を取り上げながら、その転換点としてストックホルム国連人間環境会議を置き、日本の水俣病など公害問題との接点を描く教材(小川2019)の一部を提示する。水俣病患者が現地会議に参加したことを素材とし、その後のカナダやアジアなど世界の環境汚染問題と患者たちがつながったこと、会議に参加した女性たちがアジアとつながり女性と子どもを守る活動に参加していくこと、研究者らが水俣を訪問して日本の近代化と異なる歴史を描こうとしたことなどを叙述する。これらの事例は、水俣が発する「問い」の広がりを示している。グローバル化が進む現在では環境問題の国際政治化はより一層進み、世界の格差を前提とした国際対立も見られる。近年、社会問題化する環境問題について言及し、これまでの日本の環境教育でよいのだろうかと問い、その問いを示した「レッスン」を付す。

このような歴史叙述を踏まえた授業として、第6章では、カナダの水銀汚染問題を取り上げる。カナダでは先住民たちの文化破壊とともに水銀汚染問題が生じていた。先住民たちの証言を授業で読み、コミュニティ内外の問題とは何かを生徒は考えた。そして、もし現地を訪れた日本の調査団だったとしたら、どのような手紙をカナダの村に送るかを考えて書くという歴史実践に取り組んだ。授業の前と後では「公害」や「水俣病」の定義を書いてもらうようにしたところ、日本だけでなくカナダの水銀汚染を知れば、定義が「普遍化」「具体化」「構造化」していくとまとめられるような様子が見られた。

もう一つの授業実践として、第7章では公害輸出を対象化し、現在の環境汚染を事例とする授業を検討する。生徒は、水俣病発生初期(「奇病時代」)に関する4つの立場に分かれた資料を読み取り、その時にできたことやできなかったことを考え、環境への責任について意見を述べた。次に、横浜方式の導入が原子力船母港化を断り、結

果として下北半島がその役割を果たすようになることを検討し、公害輸出の構造にもふれた。最後に廃プラスチック輸出問題を取り上げて検討したところ、環境活動の情報ネットワークを構築することを検討するなど、生徒は自分にできることを考察していった。環境について考える地域スケールを変化させることで、近くの社会から見えなくなる公害の問題を捉え、生徒が過去と現在の問題を重ねながら、自分が環境に対してできることを考えるようになった。

4. 成果と今後の課題

本論文では、二つの課題を設定した。第一は、水俣病の歴史と経験が生徒のものになる過程を、〈水俣の学び〉の取り組みから明らかにすることであり、第二は、第一の課題の追究を通じて、歴史教育に新たな知見を加えることである。

研究の成果として、本論文は、「社会のなかで取り組む歴史学習」では水俣病学習の変遷とともに、水俣地域内部で加害／被害関係に限定されない学びが展開していく過程を、「教室のなかで取り組む歴史学習」では「社会のなかで取り組む歴史学習」を反映した歴史実践としての教材や授業の実態を、それぞれ明らかにした。

この二つの歴史学習のなかで行われている「歴史実践」を重ねてみると、「歴史実践としての歴史教育」の姿が浮かび上がり、子どもが歴史を自分のものとしていく過程が見えてくる。その特徴は、次の二点である。

一つは、水俣病の学習のなかで「普遍に気づく」という点である。水俣病学習史を振り返れば、1980年代以降になると、加害／被害関係に限定されない、水俣病から普遍的な問題と個人の生き方を問う〈水俣の学び〉がはじまった。ここでの「普遍に気づく」とは、自然と人間の関係や、生命の意味などに気づくことを指す。新たな〈水俣の学び〉は、学校に先行して、水俣の地域社会内部で患者や支援者たちによって行われており、90年代の地域再生事業の前提となっていた。このような普遍的な課題と個人の生き方について学べるようになったことが、学習者を外部から呼び込む要素になる。フィールドワークで水俣を訪れた生徒は、人びとがおかれた「状況」と人びとの「認識」の双方の理解が重要だと考え、そのなかで「普遍に気づく」契機を得るようになった。

もう一つは「他者と出会う」ということである。3・11 原発事故後に水俣を訪問した生徒は、現地で自身と異なる「水俣病」理解と出会い、その経験に向き合った。「教室のなかで取り組む歴史学習」では、視野を世界に広げて各地の水銀汚染や環境問題を対象として、教材化と授業を行った。生徒たちは、水俣と他地域の課題（先住民問題、公害輸出問題）に向き合う人びとをつなげて考察することで「水俣病」の認識を上書きしていった。

このような、地域のなかで「普遍に気づく」とことと、社会や教室で個別具体的な「他者と出会う」ことのあいだで、相互作用的な学びが生じている。水俣という一つの地

域のなかに、普遍的な、あるいはグローバルな課題に気づき、普遍を介して個別具体的な歴史実践に意味を見出していく。そのような歴史実践の過程を経て、子どもは歴史を自分のものにしていくことが、本論文から明らかとなった。

以上は、本論文の第一の課題に対応した成果であり、この成果から、歴史教育に新たな知見を加えるという第二の課題に対する成果が見通せる。本論文の歴史教育としての成果は、序章の研究史でとりあげた、吉田悟郎氏らによる「世界と出会う」という歴史教育の系譜に位置づけることができる。1980年代から1990年代に主に組み込まれてきたこれらの歴史教育に対して、本論文では、「社会のなかで取り組む歴史学習」と「教室のなかで取り組む歴史学習」の二つの視角から学びを重ねることの有効性を提起し、さらに、歴史実践の視点を試みることを通じて、「普遍に気づく」と「他者に出会う」という学びの重要な論点を提示することができた。「社会のなかで取り組む歴史学習」と「教室のなかで取り組む歴史学習」の二つの視角と、「普遍に気づく」と「他者に出会う」という二つの重要な論点、それに加えて歴史実践の視点により、子どもが歴史を自分のものとする過程を提示できたこと、ここに本論文の歴史教育に対する新たな知見の問題提起がある。

以上をふまえ、本論文からの展望と課題として、歴史実践としての歴史教育論を敷衍して「広義の歴史教育」を論じていくことと、公害と環境問題の歴史学習を深めることで探究的歴史学習の事例を提示していくことをあげた。

参考文献

- 色川大吉編『水俣の啓示 上・下』筑摩書房、1983年
- 白井嘉一『戦後歴史教育と社会科』岩崎書店、1982年
- 大門正克・岡田知弘・川内淳史・川西英通・高岡裕之編『「生存」の東北史』大月書店、2013年
- 小川幸司「〈私たち〉の世界史へ」荒川正晴ほか編『岩波講座世界歴史 1』岩波書店、2021年
- 小川幸司『世界史とは何か』岩波書店、2023年
- 小川輝光『3・11後の水俣／MINAMATA』清水書院、2019年
- 近藤孝弘編『歴史教育の比較史』名古屋大学出版会、2020年
- 今野日出晴『歴史学と歴史教育の構図』東京大学出版会、2008年
- 中村洋樹「歴史実践（Doing History）としての歴史学習の論理と意義」『社会科学研究』79号、2013年
- 原田智仁『世界史教育内容開発研究』風間書房、2000年
- 二井正浩編『レリバンスの視点からの歴史教育改革論』風間書房、2022年
- 保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』岩波書店、2018年
- 宮原武夫『子どもは歴史をどう学ぶか』青木書店、1998年
- 除本理史・林美帆『「地域の価値」をつくる』東信堂、2022年
- 吉田悟郎『世界史学講義 上・下巻』御茶の水書房、1995年
- 渡部竜也『Doing History』清水書院、2019年